

生徒指導を通して

「気付く力」を獲得させ、

変化を生き抜く主体性を育む

「素直だけれど、受け身」「程々で満足する」など、生徒の気質の変化が指摘される中、高校における生徒指導は今、何を主眼に置こうとしているのか。グローバル化、デジタル化など、著しい社会環境の変化を生きるために必要な生徒指導を、3人の高校教師がそれぞれの日々の体験を踏まえて語り合う。

一見「素直」な生徒に 今、他者意識が必要

白井 最近、生徒指導に占める規範指導の割合が小さくなったのは事実です。以前は、本校にも若者らしい反骨精神を持った生徒が存在しましたが、他の進学校同様、そうした生徒はほとんどいなくなりました。若いエネルギーゆえの逸脱も許さないと、社会全体が萎縮しているのだからかと考えることがあります。

早川 社会では、「難関大学に行く

だけでは意味がない」「出来る人だけではなく、出来ない人にも存在価値がある」といった言葉があふれています。それが正論であることは大人の私たちには分かっていますが、子どもたちには分かっています。どうすればいいのか、どのように自分を表現すればいいのかが見えにくくなっているのかもしれない。1つの軸だけで人を比べる社会は不幸ですが、どの軸でもはつきりと比べてもらえない社会も若者にとっては生きにくい社会です。だから生徒はどの場面でも目立たないようにして

いるのだと私は思います。

大塚 「目立ってはいけない」という意識は、志望校選択でも感じます。成績が良い生徒でも、志望がすぐく控えめなケースが最近は少なくありません。自分の人生に対して冒險する気持ちが弱いような気がします。だから、教師が面談などで「高い目標を掲げることの意味」を説明し、背中を押してあげないといけません。今の生徒は素直だけれど手が掛かるという認識は、多くの学校に共通のものではないでしょうか。

早川 素直さの度が過ぎると思うこ



茨城県立土浦第一高校

白井健司 うすい・けんじ

教職歴35年。同校に赴任して13年目。進路指導部副部長。担当教科は生物。

茨城県立土浦第一高校◎1897（明治30）年創立。13年度入試では、国公立大は、東北大、筑波大、東京大、京都大などに187人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大などに延べ531人が合格（現浪計

ともあります。以前、校則に違反した生徒を論していたら、「自分が悪かったのは分かるけれど、もしかしたらまた違反してしまうかもしれないから、もうしませんと言う自信がありません」と言われました。「それを言うてはおしまだよ」と言いなくなるくらいの素直さなのです。

白井 素直なだけけれど、こちらの言葉が心に染みている気がしないのですよね。注意したその時には素直



千葉県・私立芝浦工業大学柏中学・高校
早川千春 はやかわ・ちはる

教職歴20年。同校に赴任して21年目。進路部長。担当教科は国語。

芝浦工業大学柏中学・高校◎1980(昭和55)年創立。13年度入試では、国公立大は、東北大、東京大、千葉大などに62人が合格。私立大は、慶應義塾大、芝浦工業大、東京理科大学、早稲田大などに延べ929人が合格(現浪計)

に返事はするけれど、また繰り返す。なぜ注意されているのかを深く考えず、聞き流すことで自分を防御しているような気すらします。

大塚 紛失や忘れ物など、自分の不注意で他人に余計なひと手間を掛けた時に、「ありがとうございます」のひと言がずっと出ない生徒も確かにいます。感謝のひと言が出てこないのは、他者に対する想像力が弱いのだろうかと考えてしまいます。

白井 他者への影響を想像できなくなっているのでしょうか。だから、「遅刻をする人がいると授業の開始が遅れ、他の人たちの勉強時間が短くなってしまう」などと、他人に手間や迷惑を掛けていることをかみ砕いて説明することが必要になっていくように思います。

早川 他者意識を高め、生徒の気づきの度合いをどう上げていくかは、生徒指導における大きな課題だと思います。「自分の言動は周囲の人たちにどのような影響を与えているのか」を自然に考えるような工夫をしていかなければなりません。

答えが1つではない問題に
向き合う力を生徒指導で養う

大塚 他者意識が育めるのは、行事や部活動など、目的に向かって切磋琢磨する場でしょう。勝つためには自分1人の努力では駄目だし、かといって仲良くしているだけでは勝てないことにも気付くはずですから。

白井 他者意識は学力とも密接に関



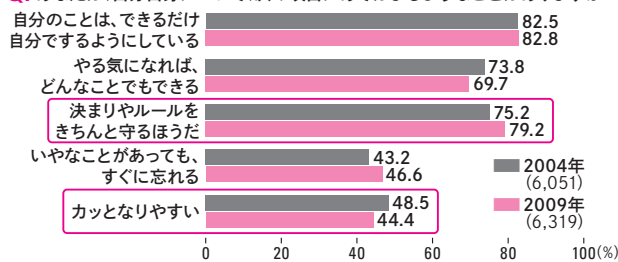
山口県立下関西高校
大塚睦之 おおつか・のぶゆき

教職歴23年。同校に赴任して13年目。進路指導部部长。担当教科は数学。

山口県立下関西高校◎1920(大正9)年創立。13年度入試では、国公立大は、東京大、京都大、山口大、九州大などに145人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ325人が合格(現浪計)

資料◎「いい子」化が進む高校生

Q. あなたは、自分自身について、次の項目にあてはまるようなことはありますか



*調査対象は高校1・2年生。()内はサンプル数。
*「とてもそう」+「まあそう」の%。*項目は一部を抜粋。
出典/ベネッセ教育総合研究所「第2回 子ども生活実態基本調査」(2009)

係していると思います。東京大などの難関大学の志望者に対しても、「課外授業でひたすら教える指導だけでは成果は上がらない」というのが本校の共通理解です。進学指導の経験が豊かな教師ほど、高い志望目標の達成には、生徒は、自分で勉強する力を身に付ける必要があります、それは学習活動だけでなく、行事や部活動なども含めた総合的な活動を通して

育めるものだと考えています。

大塚 勉強だけでなく、部活動や行事も頑張るのは大変ですが、そうした状態に身を置くことは、自分を理解し、これからどう生きていくのかを考える機会になると思います。部活動や行事の中で限界にチャレンジすることで、自分の能力や考え方を知ることが出来ますし、挫折からどう這い上がるのかも学びます。そうした一連の経験から自分だけでなく他者への理解も深めていく……それが高校の生徒指導だと考えます。

早川 高校は、他者と協同する力を身に付ける場だと思います。価値観の異なる人と協力する、課題を自分で見付けて、その解決策を考えるなど、これからの社会で求められる力を養う機会を、学校がどれくらいつくれるかが問われていると思います。それは、「グローバル化だから英語、ICT……」とスキルを細分



「他者と協同する苦労や
充実感を授業の中で生徒に
味わわせたい」 白井



「生徒が主体的に活動できる
工夫、ノウハウを校内で
共有したい」 早川

化することだけではありません。環境変化の激しい時代を生きるために、どんな状況にも適応できる力、答えが1つではない問いに向き合う胆力を養う場が必要です。

白井 そうした力の育成を、私たちは授業でも強く意識すべきだと思います。実験で失敗したような時は、なぜうまくいかなかったかを仲間と一緒に考えるような経験を学校で積ませることが、グローバル社会に向けての教育には必要だと感じます。

大塚 部活動でも同じですよ。野球部員は皆野球が大好きですが、全員がピッチャーで4番になれるわけではありません。好きな世界で充実

した時間を過ごすためには、いろいろなポジションを守れるように練習したり、試合に出なくてもチームに貢献する方法を考えたりすることも必要です。部活動においても、「素振りをして1000回やればうまくなる」など、答えが明確なことはわりではありません。問いも答えも自分で見付けなければいけないということとを、部活動の中でどれだけ意識させられるかも、生徒指導で教師に求められる力量なのだと思います。

早川 集団の中にはついてこられない人もいるわけで、そうした人を叱咤激励し、集団の力を高めていく時にも他者意識が必要不可欠です。

白井 利害を巡って生徒同士が衝突する場面も大切にしたものです。例えば、生徒会の予算折衝や文化祭の運営などの議論を見ると、生徒の成長を強く感じます。生徒の不満が出ないように、教師が予算を配分し

てやるようなことは、生徒の成長の機会を奪うことと同じです。

大塚 生徒を仲良しグループに閉じ込めてはいけませんよ。勝てる部は、やはり部内での競争が厳しい部です。ただ、レギュラーと控えの間の溝が深くなると、とたんに勝てなくなるのも事実です。だから、競争と思いやりの両方が必要だということに気付かせたいのです。

白井 授業でも、他者と協同するからこそその苦労や充実感を可能な限り味わわせたいですね。実験なども、特定の生徒が頑張ってる他の生徒は傍観していれば済むような進め方ではなく、一人ひとりがしっかりと動かないと全体が進まないような構成が必要だと思います。部活動でも授業でも、学校が常にグループで動いていることを最大限に利用するように、私たちはもっと指導技術を磨かなければなりません。

早川 デイベートなどでも、相手グループからの質問は指名で行うようにして、チーム全体の理解度と回答力を得点化するなど、全員が意欲的に参加する仕掛けをもっと考えたいと思います。そういった工夫を教員



間で共有し、生徒が主体的に活動できるノウハウを校内で蓄積することを、もっと意識したいと思います。

教師が声を掛け続けながら変化を待つ

大塚 私が最近、気になるのは、勝てなかった時、うまくいかなかった時にあまり悔しがらない生徒がいる

ことです。

早川 きっと「夢はかなわなくても頑張った」と納得するからでしょう。頑張ったことだけで納得させないためには、絶対達成したい目標、これなら出来るかも、という目標を言語化することが大切だと思います。

大塚 目標を適切に設定し、振り返る場は確かに必要ですよ。例えば、本校の野球部にも日誌があります。最初はただその日の練習を記録するだけです。でも、続けるうちに自分の考えや課題、計画を書く生徒が増えていきます。文字にすることで頭の中が整理され、記録だけでは駄目だと気が付くでしょう。

早川 まさに生徒が自立をするための機会ですね。本校の生徒は共通の手帳を活用してタスク管理を行っています。全員がきちんと活用できているわけではありません。やはり、必要性に気付くタイミングはまちまちなのです。だからこそ、私たちは「気付くまで機会を設け続ける」べきではないでしょうか。

大塚 私たち教師は、変化や成長を



「教師として問い掛け、励ましながら生徒の成長を待つ姿勢を大事にしたい」 大塚

急ぐきらいがあります。とにかく生徒に考えさせ、自分で行動するその時を待つことが大切なのでしょう。

臼井 手帳や日誌のような機会を生かして成長する生徒もいますが、そうではない生徒もいます。だから、

1つの場で全ての生徒を変えようと思わないことが重要だと思います。この取り組みで変わる生徒が何人か出てくれば……という気持ちが大切です。「どうして手帳を書いてこないのか」と叱責し始めると、たとえ書き始めても強制になってしまします。場はつくり続けるけれど、それをどう生かすか、生徒の自立を待ちたいものです。

早川 生徒を呼び出して叱ることに手間を掛けても、生徒は自立しないでしょう。その代わり、「こういうやり方はどうか?」「やってみるこ

とでこんな言いがある」と教えるところには手間を掛けたいと思います。そのノウハウの共有が出来れば、教師の負担感は減り、学校全体としての主体性の育成につながるのではないのでしょうか。

大塚 自分の頭で考え、自分の判断でやってみて、自分の価値観をつくること……そうしたプロセスの中で主体性は育まれます。教師として、問い掛け、励ましながらも待つ姿勢を大事にしたいと思います。

臼井 主体性の育成は勉強と同じで、引っぱり過ぎや手の掛け過ぎはいけません。生徒を自分の思う通りに動かしているのは、生徒は結局我々を超えられません。手法を示したら、あとは励まし、自立を待つ。それが、自分たちを超える次の人材を育てるということではないのでしょうか。